

善無畏抄 (妙法蓮華經の功德)

謗法無くして此の經を持つ女人は十方虚空に充滿せる慳貪・嫉妬・瞋恚・十惡・五逆なりとも、草木の露の大風にあえるなるべし。三冬の氷の夏の日に滅するが如し。但滅し難き者は法華經謗法の罪なり。譬へば三千大千世界の草木を薪と為すとも、須弥山は一分も損じ難し。縱令七つの日出でて百千日照らすとも、大海の中をばかわかしがたし。設ひ八万聖教を読み大地微塵の塔婆を立て、大小乗の戒行を怠くし、十方世界の衆生を一字の如くに為すとも、法華經謗法の罪はきゆべからず。われら我等過去現在未來の三世の間に仏に成らずして六道の苦を受くるは偏に法華經謗法の罪なるべし。女人と生まれて百惡身に備ふるも、根本此の經謗法の罪より起これり。

(五〇九頁)

拝読の善無畏抄は御年五十四歳の時に認められた御消息文です。内容は真言の開祖である善無畏の事跡を述べられた後、善無畏が世間で真言の法を極めた高僧であると言われているのにも拘わらず、いったんは頓死して地獄に堕ち、ただ法華經の一文を唱えた為に救われて蘇生した事実を挙げられ、真言は權教であり、これを本とすることは大謗法であることを示されているのです。更に善無畏三藏ならびに弟子の金剛智、不空がいずれも天台宗に帰伏し、法華經に帰依した事実をあげられ、權實相對を以て諸宗を破折されているのです。後段は法華經が、得に女人成仏の唯一最高の道であることを述べられ、女人は真心を打ちこんで、法華經を信仰しなければならぬと教えられている御書です。

本日拝読の箇所は 法華經謗法の罪がいかに重いかを強調された段であります。

人の生命は、三世にわたつて永遠である。凡夫として、過去世のことは知る由もありませんが、現在の果法を見て推し量るならば、「我等過去・現在・未來の三世の間に仏に成らずして六道の苦を受けるは、偏に法華經謗法の罪なるべし」の御文に照らしても、何より過去の姿を示しているといえましょう。私達は、我が身を振り返れば振り返るほど、貪瞋癡をはじめ汚れた生命が己が胸中に渦巻いているのを実感するものであります。

わが身をなげうって仏道修行に励んでも、なお過去世の法華經謗法の罪障は消滅しがたいとの仰せであります。罪障消滅とは宿命轉換であり、それはそのまま一生成仏に通ずるものであります。

故に我々は、いかなる立場にあるうとも、不惜身命に徹した唱題と折伏の実践活動の仏道修行に励んでいくべきであると、仰せられた御書であります。

善無畏三藏は真言の秘法を我がものとして法力を示した人だったと言われています。

ところがある時に頓死して地獄へと堕ちてしまったのであります。その時、獄卒の責めを受け閻魔の裁きを受けた際、その罪を逃れるために、「今此三界 皆是我有 其中衆生 悉是吾子 而今此處 多諸患難 唯我一人 能為救護」との法華經の文と南無妙法蓮

華經の題目のみを唱え、地獄の責めを逃れて蘇生した。善無畏三藏の墮地獄の根本原因は法華經謗法にあり、その地獄の責めを逃れることが出来たのは、法華經を誦した功德なのである、と仰せになつていなのです。

特に現今の浄土宗、禅宗は謗法墮地獄の惡法であると喝破(誤った説を排し真実を説き明かすこと)されているのです。それが法華經に帰依すれば一切の罪惡は勿論のこと、謗法

の大罪も忽ちに消滅し、一代聖教にまだかつて許されていない女性でさえ成仏できるのであると仰せになっているのです。

拝読の御文は、「女人成仏」は、ただ法華經に限る功德で、多宝仏をはじめ十方の諸仏も、その真実を証明されている法門であります。従って、女性であればより一層に法華經の信心に精進・修行すべきであると、仰せになっているのです。

私達は無始以来からの謗法の罪があり、その罪障消滅のためにお題目を唱えなければなりません。私達が人間界に生を受けたのは、お題目を唱えて成仏するためと言っても過言ではありません。

その理由は、「この世界は仏様の世界であり、その中の衆生はすべて自分の子であり、ただ自分のみが救うことが出来る」と經文にあるからです。

このことを信じていけば、私達は正しい信心が出来るのですが、それが信じられずに謗法の罪を作ってしまうのであります。

「犬」とか「猫」に生まれたら、「ワン」とか「ニャン」としか言えません。決して南無妙法蓮華經とは唱えることは出来ません。人間として生まれてはじめて南無妙法蓮華經と唱えることが出来るのであります。このことは真実なのですが、一念発起して「仏道修行に精進しよう」と決意する人はほとんどいません。それは何故かと言うと、お題目の一遍の功德がいかにも広大であるかを知らないからです。

仏法の話は、駅の構内放送と同じで、自分の乗る列車の案内や、興味のある放送には耳を傾けますが、他の案内は聴き取ろうという気持ちがないければ、ただの雑音であり耳には入りませんが記憶として残らないのです。ですから、「私達はお題目を唱えるために生まれてきたのである」「お題目の功德は広大無辺である」との二点だけを、自分の命に刻み込むことが大切であります。

お題目の功德について、法華經題目抄（三五六頁）には

「妙と申す事は開と云う事なり。世間に財を積める蔵に鍵なければ開く事かたし」

「妙とは具の義なり。具とは円満の義なり」（同三五七頁）

「妙とは蘇生の義なり。蘇生と申すはよみがえる義なり」（同三六〇頁）

とお題目の功德の広大なることを仰せになっています。

お題目とは、すべての宝を自分のものに出来る鍵であり、すべてを満たすことのできるものであり、あらゆるものを蘇らす力となるものであります。

従って、妙法蓮華經の根本は「妙」にあり、「御本尊様を拝する時は妙の一字を見て題目を唱えなさい」という理由はここにあるのです。この世の中のあらゆる功德が「妙」の一字に具わっているのです。

譬えて言えば、大海の一滴にすべての河の水を納めているように、また如意宝珠（心のままに宝を出すことが出来る珠）は、一珠でも無量の力があるように、一遍のお題目にも如意宝珠同様、広大無辺の功德が収まっているのです。

ですから、法華題目抄(三五三頁)には「南無妙法蓮華經。問うて云はく、法華經の意も知らず、義理もあぢはらずして、只南無妙法蓮華經と計り五字七字に限りて、一日に一辺、一日乃至一年十年一期生の間に只一辺なんど唱へても軽重の惡に引かれずして四惡趣におもむかず、つひに不退の位にいたるべしや。答へて云はく、しかるべきなり」と仰せになつてゐるのです。

すなわち、一日に一遍、或いは一月に一遍、或いは一年に一遍、十年に一遍、一生に一遍唱えただけで、地獄、餓餓、畜生、修羅の四惡趣には行かず、後戻りすることがない成仏するだけの位に至るといふ意味です。

では、私達のような者でも一遍でも唱えれば成仏できるのかと言へば、

日寛上人は、「過去世に謗法が無い人は仰せのとおりである。しかし我等は過去の謗法の罪が無量であるが故、この謗法の罪を滅するには一遍という訳にはいかないのである。つまりお題目の功德が廣大であつても、過去世の謗法の罪が桁違いに大きく重いので余程唱えなければ無理である。それゆゑ御書の御文には『終に到るべし』と書かれてあるように、最終的といふ意味であり、『直ちに』とは書かれていないのである。このことをよく考えなさい」と御指南されています。

私達は久遠の昔より生死を繰り返してきていますが、なかなか成仏できないのは何故かと言へば、「法華經を信ぜず、法華經を誹謗してきた罪による」と仰せなのです。

こうして考えてくると、私達は「こうしてはいられぬ」と、お題目を必死に唱えていなくてはなりません。

また私達は、「お題目を唱える」と軽々に言いますが、御義口伝には、「唱え奉る」とあり、天台大師も「読誦し奉る」、日寛上人も当流行事抄で「我等唱へ奉る所の本門の題目」と、必ず「唱え奉る」と仰せになつてゐます。

お題目の功德の廣大無辺なることを御存じの故に、「奉る」と言われているのです。

大聖人様は、唱法華題目抄で、「妙法の二字に諸仏皆収まれり。故に妙法蓮華經の五字を唱ふる功德莫大なり」(二三〇頁)と仰せであり、日寛上人も観心本尊抄文段で、「故に此の本尊の功德、無量無辺にして廣大深遠の妙用有り。故に暫くも此の本尊を信じて南無妙法蓮華經と唱うれば、則ち祈りとして叶はざる無く、罪として滅せざる無く、福として来たらざる無く、理として顕われざる無きなり」と仰せになつてゐます。

御法主日如上人猊下も、常日頃の御指南で、「すべてを開くカギは唱題行にあり」と仰せになつてゐるとおりです。

これらの御指南を確信を持つて実践し、お題目の廣大無辺なる功德を実感できるよう、信心に精進して戴きたいと思ひます。以上を以て本日の法話とさせて戴きます。